

## 静岡県立静岡東高校

## 一定期間の変容を見取り、生徒個々の課題をより具体的に把握し、指導改善に生かす

静岡県立静岡東高校では、生徒の変容を見取って指導改善や学習改善を行うために、2学期は1・2学期の評価材料で、3学期は1～3学期の評価材料で、学習評価をすることにした。観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の3観点で一定期間の変容を見取ることで、生徒個々の課題を具体的に把握できるようになった。

#### 同校の新教育課程と その編成に向けた取り組み

本誌4月号・特集 P.12～15 を  
ご覧ください。



#### 同校の授業改善の取り組み

本誌8月号・特集 P.13～18 を  
ご覧ください。



#### 学習評価の全体の方針

- 科目ごとにシラバスを作成し、各単元の学習目標や授業展開、育成を目指す7つの資質・能力（\*1）の中で評価するものを、教科内で共有。
- 各教科で、単元ごとに観点別評価を総括する方法を統一。教務課は以下の3つの方法を例示した。
  - ①評価材料を観点別に数値化し、その平均点を算出して各観点のA・B・Cをつける。
  - ②評価材料を観点別に数値化し、その合計点に応じて各観点のA・B・Cをつける。
  - ③評価材料を観点別にA・B・Cで評価した上で、A・B・Cの数を観点別に集計した結果を基に、最終的なA・B・Cをつける。
- 生徒の変容を評価できるようにするため、1学期は1学期の、2学期は1・2学期の、3学期は1～3学期の期間の評価材料を用いて評価する。

#### 観点別評価を評定に総括する方針

- 「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点は、1：1：1の比率とする。
- 3観点のA・B・Cの組み合わせによって5段階の評定に総括する。AAA、AAB=5、BBB=3、CCC=1といった換算表を作成。

#### ●指導・学習改善につなげる仕組み

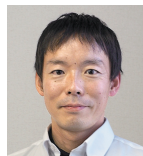
#### 変容を継続的に見取ることで 生徒への声かけがより具体的に

静岡県立静岡東高校は、各教科で科目ごとのシラバスを作成し、各単元の学習目標や授業展開、育成を目指す7つの資質・能力の中で評価するものを共有し、指導の足並みをそろえ、評価の結果を指導改善に生かしている。

3観点をどのように評価するかは各教科の裁量に任せられているが、1学年の共通事項として、1学期は1学期の、2学期は1・2学期の、3学期は1～3学期の期間の評価材料を用いて評価することにした。「前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉え」（\*2）、評価の結果を指導・学習改善につなげるという新学習指導



情報管理課主任  
**神谷隼基**  
かみや・としき  
教職歴7年。同校に赴任して3年目。数学科。



教務課  
**戸田圭亮**  
とだ・けいすけ  
教職歴9年。同校に赴任して1年目。国語科。



教務主任  
**中上明仁**  
なかうえ・あきひと  
教職歴22年。同校に赴任して5年目。理科（化学）。



校長  
**鈴木伸彦**  
すずき・のぶひこ  
教職歴38年。同校に赴任して2年目。

\*1 「課題設定解決力」「論理的思考力」「自己実現力」「自己管理能力」「発信力」「自己肯定力」「社会参画力」の7つ。

\*2 文部科学省教育課程企画特別部会論点整理「学習評価の在り方について 3. 学習評価の在り方について」。

国語科

現代の国語

■ 定期考査の解答用紙（抜粋）

問四	問二	問一	
エ	イ	d	a
問五	問三	繁栄	依存
人	Y		
問	イ	e	b
の	Z	双方	及ぼす
活	ア		
動			
み			
問六			c
イ			はため

	思判表	知技
一	/8	/8
二	/11	/8
三	/18	/5
合計	/29	/21

「知識・技能」と「思考・判断・表現」の観点別に作問し、問題用紙や解答用紙にも、小問ごとに評価観点を明記。ひと目でどの観点か分かるように、「知識・技能」の観点で評価される小問にはグレーの網かけをした。

大問ごとに、「知識・技能」「思考・判断・表現」の得点を算出して記入。また、合計点が同じでも、「知識・技能」が50点の場合と、「知識・技能」が25点、「思考・判断・表現」が25点で計50点の場合とでは、観点別評価の結果が異なり、評定も異なる可能性があるため、生徒に説明している。

■ 定期考査とワークシートを同等に評価。学習姿勢の改善につながる

「現代の国語」では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域を均等に育成することを意識して指導計画を立てた。評価材料は、ワークシートや定期考査、「話すこと」のパフォーマンス課題とそれに作成する原稿などとし、いずれも観点別に評価した。

定期考査は、「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点別に作問した（左図）。ワークシートは、単元の内容に応じて、「知識・技能」「主体的に学習に取り組む態度」、または「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」と、評価の観点を変えた。

定期考査とワークシートの評価比率は、同等とした。これまでのように、定期考査の評価比率を高くすると、「読むこと」の評価材料が多くなるので、3領域でバランスを取るためだ。

「生徒には、定期考査で高い点数が取れても、ワークシートの評価がよくなければ、最終的な評価は高くつかないことを説明すると、ワークシートにもきちんと取り組むようになり、学習姿勢の改善につながっています」（戸田先生）

ワークシートは、設問を細かくし、スモールステップで読解を進めるものにした。単元の最初と最後に同じ問い（下図）を設け、それを並べて見ることで、自身の変容の度合いや内容が視覚的に分かるようにした。すると、「論理的に文章を組み立てられるようになった」「自分の考えを的確に表現できるようになってきた」などと、自己の成長を認識することができている振り返りが、ワークシートに書かれるようになった。生徒のワークシートの振り返りは、指導改善の材料にもしている。

■ ワークシート（抜粋）

『時間と自由の関係について』 内山節

思判表: \_\_\_\_\_ 主体: \_\_\_\_\_

★教科書 98 ページにある「経過する時間」とはどのようなものか、自分の経験にあてはめて説明しましょう。

（第二段落）  
①本文中の二つの時間について

まとめ  
★教科書 98 ページにある「経過する時間」とはどのようなものか、自分の経験にあてはめて説明しましょう。

ワークシートを「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の観点で評価する場合、シートにもそれらを明記。

ワークシートの最初と最後に同じ問いに設定。授業を通じて自身の「思考・判断・表現」にはどのような変容があったのか学習を振り返り、次の学習につなげられるようにした。

※学校資料を基に編集部で作成。

要領の趣旨を踏まえたとき、教務主任の中上明仁先生は説明する。「3年次は大学に提出する調査書を作成するため、2学期の評価は1・2学期分の評価材料を用いてつけますが、それと同じ考え方は、先行事例がなく、導入にためらいはありましたが、評価材料の調査の対象期間を長くすれば、生徒の変容が把握しやすくなるかと考え、実施に踏み切りました」

教務課の戸田圭亮先生は、そうした仕組みにより、生徒への声かけがより具体的になったと語る。「1・2学期の評価材料を通して見ると、文章がうまく書けるようになってきている、誤字・脱字が多くなるなどの気づきがあり、そうした点を指摘した上で生徒に助言しています」

「現代の国語」では、ワークシートと定期考査の評価比率を同等とした。1学期の評価で、ワークシートの評価が低かった生徒から、「定期考査の得点が高いのに、評価が低いのはなぜか」と質問があったが、教師が評価の目的や実施方法を説明すると、その生徒は納得し、

## 数学科

## 数学Ⅱ

### 定期考査の結果に対する助言を類型化してフィードバック

旧課程生である2学年の数学科の定期考査は、「知識・理解」「数学的な技能」「数学的な見方・考え方」の観点別に作問。結果は、科目担当者間で分析し、例えば、「知識・理解」の点数がよくなければ、授業でのその観点の扱いを厚くするなど、指導改善に生かしている。また、観点別の点数に応じた助言を、生徒一人ひとりに行っている。

「助言の内容は、観点別の点数に応じて類型化しました。それにより、生徒個別の課題に対して適切な助言を、効率よく行っています。生徒からは、『このまま頑張ればよいと分かり安心した』『学習の改善方法が示されて役に立った』といった声が聞かれています」（神谷先生）

「数学的な見方・考え方」や「関心・意欲・態度」の評価材料としては、レポート課題を試みている。課題では、文理共通で、大学入学共通テストの類題や日常生活との関連を意識した問題を出している。必答問題とチャレンジ問題に分けて構成することで、数学が苦手な生徒も取り組めるようにした。今後は、レポートを生徒に返却し、教師のフィードバックに基づいて修正し、再度提出させることで、自己調整力を見取る材料にする予定だ。

## 理科

## 化学基礎

### 実験の事前課題で、目標と指導と評価を一体化

理科では、授業を通じて育みたい生徒像を設定し、それを基に、各科目の授業と評価の計画を作成。定期考査も全クラス共通問題とした。「化学基礎」では、共通の実験を各学期に1回行い、評価は、定期考査7割、実験レポート2割、週末課題1割と、評価比率を統一。実験では事前課題とレポートに取り組みせ、定期考査では実験に関する会話文形式の問題を出した。いずれも3観点で評価し、その結果を授業展開や発問等の改善に生かしている。

「事前課題は、実験に関する調べ学習です。以前は教師が説明していましたが、授業のねらいの1つである『主体的に実験を行う』ためには、生徒の主体性を引き出す機会が必要と考え、事前課題を出し、『主体的に学習に取り組む態度』の評価材料にしました。目標・指導・評価の一体化を図る授業改善ができたと思います」（中上先生）

小単元の終了後には、週末課題を「Classi」(\*3)で配信し、自動採点で到達度を測れるようにした。各学期に約20回実施し、生徒は学習改善に生かしている。加えて、小単元の内容を80字でまとめる課題も出し、いずれも「主体的に学習に取り組む態度」の評価材料としている。

2学期からはワークシートにも意欲的に取り組むようになった。

また、「主体的に学習に取り組む態度」は、単独で評価せず、パフォーマンス課題やワークシートなどで「知識・技能」「思考・判断・表現」のいずれかと連動させる形で評価している。「主体的に学習に取り組む態度」に含まれる、学習における自己調整力などを見取るため、そうした工夫は教科を超えて共有し、学校全体として評価の改善を図っている。

観点別評価の導入によって課題をより具体的に把握することができるとなり、それが指導改善や生徒への助言において役立っているといった教師の声も上がっている。数学科では、分野ごとに、知識不足なのか、思考力不足なのか、課題をより明確にし、それを踏まえて、その後の授業の力点を変えている。生徒への助言もより個別化できていると、情報管理課主任の神谷隼基先生は語る。

「評価を分野ごとに見ると、どの分野も知識が不十分な生徒、分野によって到達度にむらがある生

徒など、個別の課題が具体的にわかります。それを踏まえて、生徒にかける言葉や提示する問題を考えています」

### ●展望

#### 効率的・効果的な評価方法を、全校で模索

今後は、各単元の指導計画に、観点別のルーブリックを記載する予定だ。そして、効率的・効果的な評価のあり方を模索し続けていきたいと、鈴木伸彦校長は語る。

「中学3年生向けの学校説明会で、生徒本位の評価を教科内で足並みをそろえて実践していると説明すると、参加者は安心し、学校への信頼につながっています。一方で、評価材料が多くなると、教師と生徒の双方に負担がかかります。また、1人の教師が1学年全員を評価する科目もあります。数値化して測定できるものを見定めて効率よく評価したり、評価材料を精選したりと、生徒にとっても教師にとってもよりよい評価のあり方を、不断に模索していきます」

\* 3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。